

(続紙 1)

京都大学	博士（ 経済学 ）	氏名	村井明彦
論文題目	グリーンスパンの隠し絵 あるいは一国経済にとって中央銀行とは何か		
(論文内容の要旨)			
本論文は前FRB議長として長期の通貨の安定に成功したグリーンスパンの政策と思想を学問的分析対象とした研究であり、グリーンスパンの思想形成を主流派経済学以上に（新）オーストリア学派経済学との密接な関係に見てとり、グリーンスパンの実務家としての長期間の政策を「疑似金本位制」政策として把握しようと試みたものである。本論文は5章からなる。 グリーンスパンはロシア生まれの亡命作家として知られるアイン・ランドをメンターとしていた。1～3章はランドの思想を踏まえ、それとの関連に注意しつつグリーンスパンの若き日の思想形成を詳細に辿っている。 第1章「我あり、ゆえに我思う グリーンスパンのアイン・ランド・コネクション1」は、ランドの思想を哲学的な側面からリバタリアンとして定式化するとともに、グリーンスパンのランドとの交流を描くものである。グリーンスパンはランドとの出逢いで世界観が変わったと語っている。この事実には経済学者たちは目を向けないが、ランドとの関係を無視しては彼の金融政策は理解できない、というのが著者の主張である。 第2章「中央銀行を嫌う中央銀行家の肖像 グリーンスパンのアイン・ランド・コネクション2」は、グリーンスパンが長期にわたって金融の安定化に成功したのは、偶然ではなく、各種資料から彼の金融政策の根底には「疑似金本位制」（Replicated Gold Standard: RGS）と名付けるべき原理があることを主張する。彼は主流派経済学を理解していたが、しかしケインズ派でもマネタリストでもなく、オーストリア学派から影響を受けていた、というのが著者の見解である。 第3章「『根拠なき熱狂』講演の根拠 グリーンスパンのアイン・ランド・コネクション3」は、オーストリア学派の資本理論に分け入り、それを通じてグリーンスパンのマクロ経済分析の枠組みを理解する試みである。「疑似金本位制」と名付けた経済原理がいかなるものであるかの真相がここで示される。 第4章「連邦準備廃止論のオーストリア学派的コンテクスト ミーゼス、ロスバードの遺産とロン・ポール議員」は、連邦準備廃止運動に熱心な下院議員ロン・ポールを扱う。ポールはグリーンスパンと同じ土俵で考えており、彼らを新オーストリア学派と見なすことができると著者は主張する。新オーストリア学派は中央銀行に敵対的で、その役目を限定的に考えている。グリーンスパンが心情的に中央銀行の存続に反対であるにもかかわらずFRBの議長を20年にもわたって務めたのは一見逆説的であるようにも思えるが、実はそうではないというのが著者の見解である。 第5章「グリーンスパンの隠し絵」は、サブプライム・ローンに発する金融危機の前後の時期の、グリーンスパンをめぐる論争の概観を行うとともに、通貨の安定とバブルの予防に関わる、マクロ金融政策の可能性と危険性について、市場経済や経済の			

原理をどう見るかという世界理解の根底に遡って考察している。「隠し絵」というのは、中央銀行総裁でありながら、中央銀行にできることは物価安定（と所得増大）であるという思想が根底にあるという意味である。あるいは中央銀行の理想の姿と言ってもよいであろう。そしてそれは、結局は今では不可能な金本位制を指向するものだという。問題はリスク管理であり、何が有効かであるが、グリーンスパン流の政策は有効であると著者は主張する。

(論文審査の結果の要旨)

グリーン스パンの金融政策には毀誉褒貶はなはだしいものがあるが、それをどう理解するかには、様々なアプローチが考えられるであろう。本論文は、彼の思想形成を詳細に振り返り、その哲学的基礎にまで遡ることによって深く理解しようと試みたもので、独創性に富んだ優れた論文である。とりわけ、思想史のアプローチによって、彼の若き日の思想形成を詳細に掘り下げた1～3章は優れた分析となっている。多彩な人物が登場し、関連が手繰られ、すぐれた文章で読者をひきつける。

本論文の貢献は第一に、アイン・ランドとの交友とグリーン스パンの思想のオーストリア学派のルーツ、もう一つのリバタリアンのルーツが開示される。その分析は見事である。これまで我が国では作家としてしか知られていなかったが、ここでのアイン・ランドは、作家にとどまらず、リバタリアンとしてアイン・ランド・サークルの主催者であり、少人数ながら、ニューヨーク知識人グループのメンターであったことが掘り起こされ、興味深く描き出されている。それはオーストリアのモンペルラン・ソサイティのミニ版、アメリカ版に譬えられるかもしれない。

第二に、著者がグリーン스パンの金融政策の根底にあると予想される原理を明確化するために、それをあえて「疑似金本位制」(RGS: 著者の造語)と名付け、それによって信用膨張をコントロールする「予防的利上げ」政策を遂行していたという解釈を提出したことも、重要な点である。FRB議長として通貨の安定につとめ、長期の安定を実現できたことを、たんに偶然に恵まれた、幸運であったと見るのは、理論の放棄であろう。実際に、本論文ではその根底にはオーストリア学派の資本理論があることを指摘し、理論の開示に踏み込んでいる。こうしてオーストリア学派の信用理論が彼の政策の理論的基礎を形成していたことが、説得的に示されている。

第三に、グリーン스パンを焦点としつつも、アメリカのオーストリア学派、ミーゼスやハイエク、ハズリット、ロスバード、ブランデン、ロン・ポールなどを広く鳥瞰し、彼らをグループとして知性史的に把握した点も有益である。いっそうの調査と検証が必要に思われるが、アイン・ランド・サークルとアメリカ・オーストリア学派の重層性と関連性がはじめて明確に把握された。

このように思想史的な観点からする優れた論文であるが、しかし、やや説得性を欠く点があることも否めない。特に第5章の議論は再検討の余地がある。すなわち、第5章でのグリーン스パンの「謎」をめぐる論争、ルールと裁量等をめぐる論争を分析した議論において、現代の世界経済の実態の理解、特に1995年以降の金融のグローバル化、資本移動、信用膨張、リスク・マネーなどに関わる現状認識が不十分であり、また主流派経済学の理論モデルの理解に関しても不十分な点があること、したがっていっそうの研鑽が望まれることも指摘しなければならない。とはいえ、そのことは本論文の功績をなくすものではない。

よって、本論文は博士(経済学)の学位論文として価値あるものと認める。なお平成25年1月23日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。